



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学埋蔵文化財調査室ニュースレター 第11号
Description	特集 「北大式」
Issue Date	2011-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53527
Type	journal
File Information	NL11.pdf



埋蔵文化財調査室ニュースレター

特集 「北大式」

北大式土器とは、紀元5世紀から7世紀にかけて、北海道から東北地方北部にかけて、時期によっては分布圏を多少伸縮させながらも広がっていた土器型式です。「土器型式」とは、ある時期・地域に特徴的に認められる土器のまとまりのことです。そうした土器型式の設定にあたっては、該当する資料がまとまってはじめて確認された遺跡名をとってその名称が付けられます。北大式土器は、最初に北大構内から発見されたものを示準資料として設定されたために、この名称が付けられました。大学名が土器型式の名称に用いられることは全国的にも(おそらく世界的にも)例がないことです。

北大式土器は、時間的には、古墳文化の中期から後期に併行します。この時期、東北地方の中部まで、前方後円墳に象徴される「古墳文化の政治圏」が伸張してきていました。その中で、それらの地域の人々と活発な交易活動を展開し、接触を頻繁に繰り返しながらも、依然として異質な文化伝統を維持し続けようとした人々が主に残したのが北大式土器です。古代の文献史料などで「蝦夷(えみし)」と呼ばれた人々とも関連性があるのではないかと考えられています。東北日本の古代史を考えるうえで、北大式土器は非常に大きな意味を持っていることがわかるでしょう。

本特集では、北大式土器について紹介していきます。



▲K39遺跡工学部共用実験研究棟地点から発見された北大式土器（深鉢）

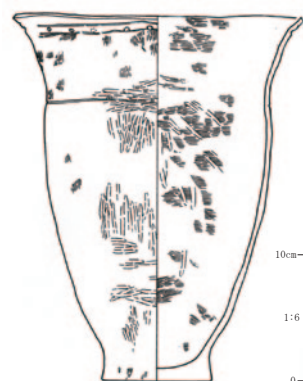
平成20年度に本発掘調査が実施された工学部共用実験研究棟地点では、5世紀中葉から6世紀前葉にかけての北大式土器がまとまって発見されました。本地点は、炉址や土坑などが多数残されている、この時期の大規模な活動拠点です。ここで発見された土器の器種(=種類)には、深鉢、鉢、坏、片口、注口があります。それぞれ完形に近い状態にまで復元できる土器が数多く見つかっており、器形や文様の詳しい検討が可能となっています。

北大式土器が出土した地点

北海道大学の札幌キャンパス内から埋蔵文化財調査室の調査で北大式土器の出土が判明している箇所は5地点になります。



出土した北大式土器



▲ 中講堂(学術交流会館)地点出土の北大式土器：深鉢(口縁部に突瘤文のみがある。文様については3頁解説参照)



▲ ポプラ並木東地区地点出土の北大式土器：深鉢(口縁部に突瘤文と微隆起線文、胴部に縄文と列点文がみられる。)



▲ ポプラ並木東地区地点から発見された北大式土器を伴う墓坑

北大式土器が発見された地点

番号	遺跡名・地点名	器種組成	深鉢の文様	備考
①	K39遺跡中講堂(学術交流会館) 地点	深鉢	突瘤文	『北大構内の遺跡5』
②	K39遺跡附属図書館本館再生整備地点	深鉢	突瘤文、微隆起線文、縄文	報告書作成中
③	K39遺跡ポプラ並木東地区地点	深鉢、片口	突瘤文、微隆起線文、縄文、列点文	『北大構内の遺跡5』
④	K39遺跡旧畜産製造実習室試掘調査地点	深鉢、片口	突瘤文、微隆起線文、縄文、沈線文	『北大構内の遺跡18』
⑤	K39遺跡工学部共用実験研究棟地点	深鉢、鉢、片口、注口、坏	突瘤文、微隆起線文、縄文、沈線文、櫛描文	『K39遺跡工学部共用実験研究棟地点発掘調査報告書』

北大式土器に見られるさまざまな文様

突瘤文

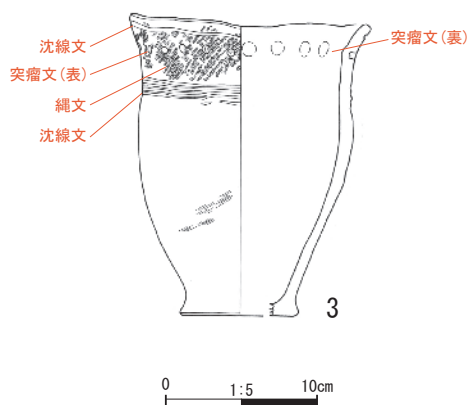
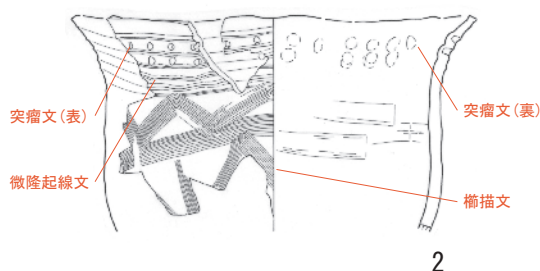
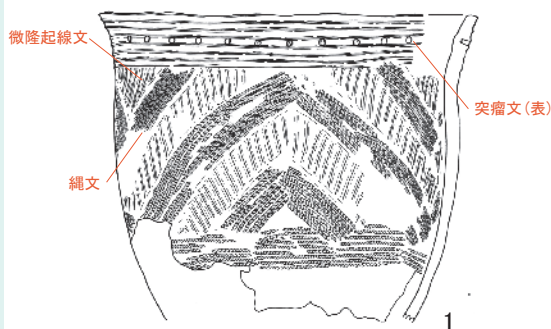
土器の上側の縁に近い箇所(口縁部と呼ばれる)に、横に20～30cmくらいの間隔で、直径5mm前後の丸い棒状の施文具が、器の外側から連続的に押し当てられて列状に付けられている文様。あけられた丸い穴は、土器の厚さの半ばほどまで達しています。穴があけられた箇所の土器の内面には、押し出された粘土による円形の出っ張りが認められます。横一列に並んで付けられているものが一般的ですが(1・3)、時には複数の列になっているものもあります(2)。

微隆起線文

長い紐状の粘土を土器の表面に貼り付け、1mm前後の出っ張りが列状に何本も作り出されている文様。口縁部に、上下方向に数本が単位となって付けられる場合が多いですが(1・2)、その下の胴部と呼ばれる箇所に、縦方向や斜め方向に付けられているものもあります。そうした場合には、「ハの字」のようなモチーフで縄文と組み合わせさせて全体が構成されることになります(1)。

縄文

撚り合わされた紐や縄を土器の器面に転がすことで付けられている文様。楕円状の粒の形をした穴が、土器の表面に規則正しく配列しているのが特徴です。北大式土器の場合には、胴部と呼ばれる箇所に微隆起線文と組み合わせさせて「ハの字」状のモチーフで付けられているのが一般的ですが(1)、時には突瘤文とともに口縁部に付けられているものもあります(3)。



▲工学部共用実験研究棟地点出土の土器

沈線文

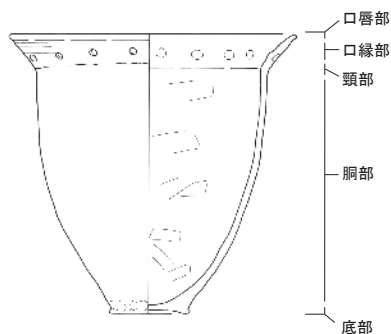
棒状の施文具の先端部分を土器の表面に押し当て、横方向に引いていくことで、幅が2～3mm前後、1mm前後の深さの溝が線状に付けられている文様。口縁部に付けられている場合が一般的で、数本が単位となっているものが多いです。なかには口縁部の縄文がつけられた箇所の上下を区画するように施されている沈線文も認められます(3)。

楕円文

楕円を数本列状に並べて土器の表面に押し当てて一定方向に引いていくことで、幅0.5mm前後の細い溝が数本セットとなって土器の表面に線状に付けられている文様。口縁部に列状に付けられるものが多いですが、それよりも下の箇所に「ハの字」状のモチーフで付けられているものもあります(2)。

列点文

棒状の施文具の先端を押し当てて、直径4～5mm前後の楕円形の穴が一定の配列をなして付けられている文様。胴部に縄文や微隆起線文と組み合わせさせて付けられていることが多いです。



▲土器の部位名称

北大式土器の広がり



北大式土器は、北海道のみならず東北地方北部にまで分布が及んでいます。弥生文化の段階には、九州から本州へ拡張してきた「水田稲作圏」に含まれていた東北地方の北部に、その後、狩猟採集漁労を生業とする「北海道系」の文化が広がるようになった背景が注目されています。

北大式土器が残された時期の生活

北海道から東北地方北部にかけての北大式土器が発見される遺跡では、火を焚いた痕跡である炉址や、地面を掘り窪めて作られた土坑が発見されることはあっても、竪穴住居址が見つかることはありません。工学部共用実験研究棟地点でも、炉址や土坑は多数発見されても、竪穴住居址は検出されませんでした。この地域では、それまで長らく竪穴住居が人々の一般的な家として使われ続けてきたことを考えれば、きわめて重要な変化といえるでしょう。炉を中心としたテント状の簡素な構造の家に住んでいた可能性が高いことから、定住的な生活を放棄し、遊動性を高めたと考えられています。



▲工学部共用実験研究棟地点で検出された炉址(中央の赤い範囲は燃焼により土が変色したところ)

河野広道博士と北大式土器

北大の構内から見つかった土器を示準資料として北大式土器を提唱したのは河野広道博士です。

河野博士は、1905年(明治38年)に生まれ、北海道帝国大学農学部で昆虫学を学び、27歳で農学博士を授与されました。フィールドでの昆虫採集を重視し、分類学だけでなく生態的な要素を含めた昆虫学を目指し、食用・薬用昆虫、アイヌの昆虫名、アイヌの毒矢と昆虫、北海道の害虫文化史などに、独創的な研究実績を残していきます。その後、研究分野は考古学にも広がり、北海道各地で発掘調査をおこなうようになります。北海道新聞社北方研究室長や北海道学芸大学札幌校(現北海道教育大学札幌校)教授を務め、1963年(昭和38年)に58歳で亡くなります。

博士が北海道の先史土器を体系的にまとめた「北海道の土器」『郷土の科学』23号(1959年)のなかで、「縄文土器から擦文式への移行期の形式」として「札幌市北海道大学校庭から出土したものを模式標本として北大式」が提唱されました。残念ながら、設定の際に用いられた資料が構内のどこから出土したのかについては記述がなく、手がかりが残されてはいませんが、続縄文文化後半の土器型式として北大式土器は現在でも一般的に使い続けられており、その位置づけは東北日本の古代史研究において重要な争点となっています。



▲ 河野広道博士(『河野広道博士没後二十年記念論文集』1984年)より

【お知らせ】平成23年度における埋蔵文化財調査室の調査・行事予定

詳細な実施日程・内容については、調査室のホームページあるいは北海道大学のホームページを通じてお知らせ致します。

- ① 医学部陽子線研究施設工事予定地(歯学部病院の北側)での発掘調査(4月から)
本発掘では地表下約 0.7m の深さから擦文文化の堅穴住居址の発見が予測されています。調査期間中には、調査室員が調査現場で調査成果を解説する現地説明会も実施する予定です。
- ② 遺跡トレイルウォーク(予定:7月・10月の2回)
調査室員の引率・説明のもと、一般市民を対象に2時間程で構内の遺跡をめぐる歩きます。
- ③ 調査成果報告会(予定:2月 会場:北大学術交流会館)
平成23年度に実施した調査研究の成果について一般市民を対象とした報告会を開催します。
- ④ ニュースレターの刊行(予定:7月・11月・3月の3回)
毎号、北大構内の遺跡にかかわる特集と調査室からのお知らせで誌面を構成します。
- ⑤ 報告書『北大構内の遺跡XIX』の刊行(予定:3月)
発掘調査成果についての年次報告

【お知らせ】『調査成果報告会要旨集』の残部を希望者の方に頒布いたします

平成23年2月13日、北海道大学学術交流会館にて、第4回北海道大学埋蔵文化財調査室調査成果報告会がおこなわれました。その際に刊行し配布した要旨集の残部がまだ若干あります。残部の範囲内で頒布いたしますので、ご希望の方は下記の連絡先までご照会下さい。



▲ 刊行した要旨集

編集後記

北大式土器が多量に出土した工学部共用実験研究棟地点での発掘調査から報告書作成にいたる過程にたずさわったことで、あらためて北大式土器にかかわるさまざまな課題を考え直すようになりました。本地点から出土した土器をさらに詳しく研究していくことで、当時の北海道と東北地方との関係の様相を具体的に明らかにしていくことができるでしょう(高倉)。

北海道大学埋蔵文化財調査室ニュースレター 第11号

発行 : 北海道大学埋蔵文化財調査室
〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目
電話 : 011-706-2671 FAX : 011-706-2094
e-mail : jun-ta@let.hokudai.ac.jp
URL : <http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~q16697/maibun/index.html>